「ダイヤモンドを勝ち取る！」

今季こそ甲子園ボウル出場、学生日本一を

アメリカンフットボール部「RACCOONS」期待の2年生に聞く

合言葉は今季も「日本一」。アメリカンフットボール部「RACCOONS」が秋の関東学生リーグ戦を見据えて調整に励んでいる。秋の関東を制し、今年暮れの学生日本一決定戦「甲子園ボウル」に勝利することが最大の目標だ。

春のオープン戦での力試し、夏場の技術・体力強化など、地力アップに余念がないメンバーの中で、日大OBで2020年に就任した須永恭通（たかゆき）ヘッドコーチが今季、とくに飛躍を期待する2年生のキープレーヤー3人に今季にかける意気込みを聞いた。

取材・構成＝学生記者 白井美有（国際経営3）、合志瑠夏（経済2）、北村結（総合政策2）

日本一のプレーヤーになりチームを頂点に導く

佐々木敬尊選手（ディフェンスライン＝DL）

ささき・けいそん。東京・佼成学園高卒、法学部２年。182センチ、97キロ。ポジションはディフェンスライン（DL）。ワンプレーで試合の流れを変え、チームを勝利に導く活躍を期している。

2009年制作の米映画「しあわせの隠れ場所」（原題・The Blind Side）は、ある家族との出会いによって、貧しい環境からはい上がり、米プロフットボールリーグ（NFL）との契約を勝ち取ったマイケル・オアー選手の実話を基にした作品だ。中学２年のとき、授業の一環で見たというこの映画が競技を始めるきっかけとなった。普段は内向的な主人公が、プレー中には大胆になるところに惹かれたそうだ。

プレーヤーとしての資質を買われ、大学進学時には他の有力校からも勧誘の声が届いていた。そうした中で、中央大学を選んだ理由は「一度も日本一になったことのない大学で日本一になりたかったから」という。「一度も勝ったことのないチームを優勝に導くことはダイヤモンドほどに価値がある。ダイヤを勝ち取りたい」と気合を込める。

DLは守備の最前列に位置し、互いに体格のよいOL（オフェンスライン）とプレーのたびにぶつかり合い、ラン攻撃を止めたり、攻撃の司令塔の相手QB（クオーターバック）にラッシュをかけて重圧を与え、パスコースを狭めたりする役割を担う。

佐々木選手はとくにパスラッシュが得意だ。ワンプレーで試合の流れを変える「クラッチプレー」を常に意識している。

▲相手のオフェンスラインとぶつかり合う佐々木敬尊選手

泥臭いプレー、勝利への執念を

甲子園ボウル優勝、学生日本一に向けて、チーム全体の意識改革が必要だと考えている。佐々木選手がこれを痛感したのは、甲子園ボウル５連覇中の関西学院大学との今年５月の練習試合だった。“真面目”なプレーに終始するRACCOONSに対し、泥臭くプレーする関学大の選手から勝利への執念が伝わってきた。日本一になるため、これがチーム全員に必要だと感じたという。

「自分が日本一のプレーヤーになることが、チームの日本一への一番の近道だと思っています」という佐々木選手の一言に、意志の強さを感じた。誰よりも真剣に練習に取り組むと気合を込め、個人としてはサック（パスを投げる前のQBをタックルすること）とロスタックル（タックルして攻撃側を後退させること）の数の関東リーグ1位を今シーズンの目標に掲げる。そのため、試合中は120%動き回れるような筋持久力と、その場の判断力を課題に挙げた。

取材で最も印象的だったのは、佐々木選手の意志に迷いがないということだ。チームとしての目標や個人としての課題、チームのために自分がすべきことなどがはっきりしていた。現状を分析し、はっきり目標設定できているのは、思考し尽くした結果なのだろう。この迷いのない意志こそが佐々木選手の強さにつながっているのだろうと感じた。

（学生記者　白井美有）

ピンチを無失点に抑える守備の要

山岸亮伽選手（ラインバッカー＝LB）

やまぎし・あきと。神奈川・鎌倉学園高卒、法学部2年。176センチ、82キロ。ポジションのラインバッカー（LB）はディフェンスラインのすぐ後ろに位置する。「LBは、オフェンス（攻撃）側の戦略を見抜く頭脳が要求されるディフェンス（守備）の要」と自負している。

高校1年の5月、野球部をやめて間もない頃にアメリカンフットボール部の友人に誘われ、体験を経て入部を決めた。高校、大学と、LBとして活躍してきた山岸選手は自らの役割について「ディフェンス（守備）の要だと思っています。LBが最強（の布陣）になれば、相手オフェンス（攻撃）に負けることはありません」と胸を張る。

◀自らを「ハンター」とたとえた山岸亮伽選手（右）。ゲーム中の目つきは鋭い

ピンチを無失点で防いだときにやりがいを覚えるという。「ディフェンスの自分たちは得点するチャンスよりも失点するピンチを迎える場面が多い。そのピンチを抑えることはこの上ない喜びになります」

練習や試合における自分自身のプレーを振り返る中で成長を実感することがある。その気持ちよさがモチベーションとなり、さらなる成長へとつながっていく。個人として掲げる目標はチームの中核として活躍し、「勝利に直接貢献すること」。改善すべき課題には「ディフェンスとして最も重要で基本的なヒットとタックルの強さ、質の向上」を挙げる。

太ももを鍛えて俊敏性を高める「レッグエクステンション」も行い、「大学の全国レベルで通用する力量まで成長する」と、高みを目指している。

プレーはどう猛に、取材では知的な印象も

自身を「ハンター」と称した山岸選手は、「動物のようにどう猛な」激しいプレーを目指す一方で、高校時代からLBとして培われた経験も武器に戦っている。戦術巧みに突破を図る相手オフェンスに対抗するため、LBにはその戦術を見破る頭脳が求められる。経験を強みに、オフェンスのプレー展開を瞬時に読んで判断する「プレーリード」を得意としているという。

取材では、「知的な方だな」という印象を受けた。「緊張するなあ。お手柔らかにお願いしますよ」と笑い、爽やかに場を和ませてくれた。そんな山岸選手の将来の夢は法曹になること。「法曹育成に力を入れている法学部に興味を持って入学しました。アメリカンフットボール部OBで弁護士になられた方に話を聞くなどして、法曹が目標になりました」

先輩、後輩に関係なく問題点などを指摘し合い、互いを高め合うことができるチームと評価する一方で、個々にスイッチの入るタイミングが異なり、チーム全体が同じ方向を見られないときがあることを課題と捉えている。

RACCOONSの目標はただひとつ、学生日本一。きつくても、競技をやめようとは思わない。「やるからには、一番上がいい」と頂点を狙う。

（学生記者　合志瑠夏）

“重い球”を確実にキャッチ、タッチダウンにつなげる

宮澤光士郎選手（WR＝ワイドレシーバー）

みやざわ・こうしろう。経済学部２年。181センチ、78キロ。ポジションはワイドレシーバー（WR）。WRはパスをキャッチして、ボールを前進させる攻撃の中心の役割を担う一人。俊敏性や走力を問われる。

大学からアメリカンフットボールを始めた宮澤選手。「自分は誰よりも努力しなければいけない」と語り、ひたすら真剣に競技に打ち込んでいる。

足の速さに自信がある。相手ディフェンダーに阻まれていても、ランアフターキャッチ（パスを受け取り、そのまま走ってボールを前進させること）で振り切り、タッチダウン（TD）につなげる。「短いパスでも自分はロングゲイン（大幅な陣地獲得）につなげられる」という。

「レシーブ数を多くして、どんな形

でもTDをとることが自分の役割」と心得ている。ラインがしっかりブロックしてクオーターバック(QB)を守り、QBが良いパスを投げても、レシーバーがキャッチできなければ、そのプレーは水泡に帰す。「自分に投げられた球はそれだけの重いもの」という意識を持つようにしているという。早く力強い走りができるよう、スプリントトレーニングも取り入れている。

1ヤードでも前進するがむしゃらさ

ロングゲインを期待されるWRは、勝敗に直結するようなビッグプレーに関わるケースが少なくない。宮澤選手も「自分がTDを取ってチームが勝つことが一番の喜び」と話す。ただ、自身の課題として「球際の弱さ、調子に波があり安定感に欠けること」を挙げ、勝負どころで飛んでくるぎりぎりのパスをしっかりキャッチできなければチームを勝たせることはできないと、自分に厳しく言い聞かせるように語った。

タックルを受けてもすぐに倒れず、1ヤードでも前にがむしゃらに進むこと、戦術通りにいかずにプレーが崩れてもパスを通すこと。チーム全体に一段上の「勝利への執念、貪欲さ、泥臭さ」を求めている。秋の関東リーグ戦で、宮澤選手をはじめ、縦横無尽に走り回るRACCOONSの選手たちの勇姿が今から楽しみだ。

高校時代は硬式野球部で甲子園出場を目指していた。中大で「一緒に甲子園を目指さないか」というRACCOONSの勧誘のキャッチフレーズが目に留まり、入部を決めた。競技は違っても目指す聖地は再び甲子園となった。

中大入学後、フットボーラーとしてのスキルを積み重ねようと努力する姿と、「日本一へ、もっと執念を持つ必要がある」とチーム全体を見渡す視野の広さ。これが宮澤選手を期待の選手へと押し上げているのかもしれない。

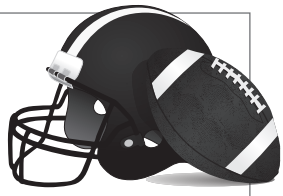
同じ中大生の私は、ゼミ長とサークル幹事として活動しているが、その両立にはいまだ課題がある。競技と真剣に向き合う宮澤選手の姿勢や顔つきは静かに燃える青い炎のようで、大きな刺激を受けた。私も焦らず、視野を広く持って、充実した大学生活を送っていきたいと思った。

（学生記者　北村結）

▲相手ディフェンダーにタックルされる宮澤光士郎選手。ボールは絶対に手放さない

▲（左上から時計回りに）取材を担当した学生記者の北村結さん、合志瑠夏さん、白井美有さん、RACCOONSの山岸亮伽選手、佐々木敬尊選手、宮澤光士郎選手

屈強な選手たちの頭脳を駆使した戦い アメリカンフットボールを知ろう！



４回の攻撃で10ヤード（1ヤードは約91.4センチ）前進すると、新たな攻撃権が与えられ、フィールドの相手ゴールライン奥（エンドゾーン）までボールを保持して運べばタッチダウン（TD、６点）。またはキックによるフィールドゴール（FG、３点）を狙う作戦もある。

パス、ランを駆使した４回の攻撃で10ヤード前進できないと、その時点で相手に攻撃権が移る。ボールを持った選手が敵陣に向かって前進する陣取り合戦という点ではラグビーに似ているが、ワンプレー中に一度だけ、前方にパスを投げられる点が決定的に異なる。

選手の体を守る防具は総重量が３～４キロ。鍛え抜かれた選手たちの肉弾戦であるとともに、さまざまな作戦を駆使した頭脳戦という要素も強い。

選手交代は自由で、オフェンス（攻撃）側、ディフェンス（守備）側とも11人の選手がプレー。選手の役割は専門化され、オフェンスチーム、ディフェンスチーム、キックオフやFGなどのスペシャルチームに分かれる。1人の選手が複数のポジションを務めるのは珍しいという。

１クオーター12分（または15分）で、1、２クオーターが前半、３、４クオーターが後半の48分制（または60分制）で行われる。フィールドは100ヤード×約53ヤードの広さ。

慣れない環境での試行錯誤…
でも、それが楽しい

△ベトナムの企業「NIKOMIX」のスタッフと（左から２人目が谷井さん）

ベトナムの企業で インターン生として働く

「HAKUMON Chuo」学生記者の谷井花蓮さん（総合政策３）が今年2月、ベトナムの企業でインターン生として活動しました。初めての海外インターンシップで得た経験を報告します。

ベトナムの首都、ハノイ市にある企業で今年2月からの1カ月間、インターン生として働くという貴重な経験をした。自分に合う企業とのマッチングを担当する仲介会社との面接を経て、マーケティングコンサルティング／不動産賃貸業の「NIKOMIX」でインターン生として活動できることになった。

就活の軸「海外で働きたい」

「NIKOMIX」のスタッフは15人中14人がベトナム人で、平均年齢は27歳と若い。事前にインターンプログラム生が履修する「海外インターンシップ」という授業を通して、ベトナムの歴史・文化について学び、働くことに対する自分の考えを深めていった。

私はまだ、志望する業界・企業が具体的に定まっていない。しかし、大学の授業でのディスカッションを通じて、仕事をする上で、私自身が「多様な人に会い、コミュニケーションを図ることができる」「自らがチャレンジできる環境が整っている」という2つを重視していることに気付いた。この2つの要素が、海外インターンシップの幾つかの候補地からベトナムの企業を選ぶ決め手にもなった。

インターンシップ初日はとても緊張していた。しかし、職場に入るとすぐに「NIKOMIX」の方々が温かく迎えてくれた。これで一気に緊張が解け、「ここでなら1カ月間、仲良く働いていけそうだ」と感じることができた。

1カ月間で得られたことはたくさんある。まず、「海外で働きたい」と強く思うようになった。それは、自分が慣れない環境において、常に試行錯誤して行動しなければならないことに楽しさを感じたからだ。

ベトナムはもちろん、文化や言語が日本と大きく異なる。「全てがうまくいかない」という状況で、「どうすればうまくいくのか」を自分で考えながら生活することにやりがいを感じた。そういった環境に身を置くことで、成長できるのではないかとも考えた。そのため、就活の軸を「海外で働くこと」に定めた。

「知らなかった自分」に気付く

インターン生としての経験は、知らなかった自分自身を知る機会にもなった。具体的な仕事の内容としては、顧客の物件内覧への付き添い、不動産業界の市場調査、仲介会社訪問などを担当した。

働き始めてすぐ、自分が「完璧主義」であることに気付いた。頼まれた仕事を自分が納得するまでやりたいと考えてしまう。NIKOMIXは「完璧主義よりもスピード」を行動指針として定めており、決められた時間内に仕事を終わらせるために、細かく計画を立て、時間を管理することの大切さを知った。

今回の経験で、これまで全く関心がなかった不動産業界に興味が湧いた。今後の就活やインターンとして活動する上では、自分自身で可能性や視野を狭めてしまうのでなく、さまざまな業界や企業を視野に入れようと考えている。

多くの人と出会い、とても刺激的な1カ月間だった。アドバイスや指導をしてくださったNIKOMIXの方々や、親切にしてくれた現地の日本人の皆様、支えてくれた家族、一緒に活動してくれた友人たちに、この場を借りてお礼を言いたい。

（学生記者　谷井花蓮）

姉の明日香と弟の海が、客船で旅行に向かう父母を見送るシーン（中央は祖母）▲

「悲しい涙、うれしい涙」その感動を伝えたい

弟の海が、母親の泣いていた姿を見たと姉の明日香（右）に打ち明けるシーン▲

FLPゼミ生が制作
短編ドラマ「お母さんのなみだ」
ドイツ・ハンブルク日本映画祭で招待上映

学生記者　小西結音（総合政策２）

「映像リテラシー」「ジャーナリスティックな感覚と時代性」「テレビの力と役割」などをテーマに学び、山崎恆成客員教授が指導を担当するFLPジャーナリズムプログラムの2022年度ゼミ生が制作した短編ドラマ「お母さんのなみだ」(I Saw Mommy Crying) が、ドイツのハンブルクで今年6月14〜18日に開催された「第24回ハンブルク日本映画祭」で招待上映という形で披露された。上映後、温かい拍手が会場を包んだという。

プロデューサーとして制作に取り組んだ中山春佳さん（2023年3月経済学部卒）と、原案・監督の徳山夏音さん（2023年3月文学部卒）は、「涙には悲しい涙とうれしい涙があることと、そこから生まれる感動、家族の絆を伝えたかった」と、ドラマに込めたメッセージを話している。

オーディションでの子役の演技「素晴らしい作品になる」と確信

「うれし涙」をモチーフに、2022年度のゼミ生（3年生12人、4年生12人）が全員でドラマ化、映像化に取り組んだ。クルーズ客船「飛鳥II」を保有、運航する郵船クルーズと日本郵船が企画に賛同して、大桟橋などのロケ地を提供し、俳優らも協力して完成した。

原案の着想は、監督の徳山さんの幼少期にさかのぼる。日本舞踊の舞台に立った3歳のとき、舞台袖で母親が泣いていた。当時わからなかった涙の理由を、娘の成長を喜ぶ涙だったと何年か後に気付いた。この懐かしい経験が原点だという。

昨年7月にロケーションハンティング（ロケハン）、8月にはキャストのオーディションを行った。主役となる姉の明日香を演じた子役の前田織音（おとね）さんの芝居を見た瞬間、徳山さんは「私のイメージした脚本にぴったり。前田さんはこの歳（当時11歳）でうれしい涙と悲しい涙の違いを理解している。これは素晴らしい作品にできる」と感じたという。

子役事務所に声をかけたり、サイトで公募したりして、明日香役には十数人の応募があった。もう一人の主役、弟の海（かい）役も3人の応募の中から迷わず選んだ。

「徹底した取材」の重要性を学ぶ 作品のもう1つのテーマは…?

指導を担当した山崎客員教授は、TBSテレビのプロデューサー、演出家で、人気ドラマ「渡る世間は鬼ばかり」などの制作を手がけている。今回は、郵船クルーズとのタイアップというアイデアもゼミ生に提案した。プロデューサーの中山さんは「先生の行動力に驚きました。タイアップの話も最初は半信半疑だったのですが、表情を見て『先生は本気だ』と気付きました」と振り返った。

短編ドラマを性別・年齢を問わず、幅広い世代の人に楽しんでもらうためにどうするか。徳山さんは「自分だけの価値観や想像でつく

▲ハンブルク日本映画祭で登壇したFLPゼミ生と山崎恆成客員教授（中央）

るのでなく、山崎先生や家族をはじめ、さまざまな人の声を聞くことが大事だと学んだ」と話した。山崎客員教授を含め、ゼミ生同士も率直に意見を伝え合える雰囲気で制作が進んだ。

実は完成した短編ドラマの背景には、多くの日本人が現役時代に長期休暇を取得できず、定年後にようやく、夫婦旅行などの形で配偶者に感謝の気持ちを表すことができるという現実が隠されている。作品に登場する大型客船「飛鳥Ⅱ」は人生の旅のゴールの象徴ともなっている。短編ドラマのもう一つのテーマとして、ゼミ生たちは、この理想と現実のギャップを描きたかったという。

編集後記

自身のドキュメンタリー映像制作のヒントにも学びの多い、貴重な取材

「涙には悲しい涙とうれしい涙がある」。プロデューサーの中山春佳さんと、原案創作と監督を務めた徳山夏音さん。2人がこの作品を作る上で一番伝えたかった感動がここにある。

徳山さんが3歳のときに立った日本舞踊の舞台袖で見守っていた母親の涙。これが着想の原点だ。制作過程では、ゼミ生同士が意見を出し合い、「涙の意味に意外性を持たせるストーリーにしたら面白いのではないか」とアイデアが膨らんでいったという。初めてのプロデューサー経験となった中山さんも、「うれし涙」というアイデアを聞き、「これは絶対にいい作品になる」と直感した。

2022年8月末、キャストのオーディションが終わり、いよいよ本格的に撮影準備を進めていこうという段階で、中山さんが体調を崩して活動に参加できなくなった。制作進行が滞り、プロデューサーの中山さんにさまざまな面で頼りすぎていたと、ゼミ生の皆が気付いた。仕事を分担する重要性と、教え合うことや後輩の成長をサポートすることの大切さを再確認したという。

山崎先生の意志の強さ、行動力 ゼミ生と“二人三脚”で創作する

TBSテレビで数々のドラマ制作を手掛けてきた山崎恆成客員教授から、ゼミ生たちは多くのことを学んだ。ゼミ生たちは当初、一案として動画サイト「YouTube」で公開する作品を思い出として残したいと考えていたそうだ。ところが、郵船クルーズとのタイアップや子役オーディションなど、どんどん話が膨らんでいき、その過程で山崎客員教授の行動力やあきらめない意志の強さを肌で感じ取り、チーム一丸となっていったという。

徳山さんは「先生は夜遅くでも、丁寧なアドバイスをメッセージで送ってくれたり、良い案を思いつけばすぐに知らせてくれたりと、対応が素早かった」と感謝する。

一方で、「先生の作品でなく、自分たちで作り上げた作品にしたい」（中山さん）というゼミ生の意思が大切にされ、現場の誰もがはっきりと意見を言える雰囲気が作られていたことも、良い作品を生む下地になったという。

現在、人材会社のＩＴ部門に勤務する徳山さんは、仕事でディスカッションの機会が多いといい、ゼミで経験したチームワークなどが、若手でも意見を求められる職場で臆せず発言する自信につながっていると教えてくれた。IT業界でデータ管理の仕事をしている中山さんも、ゼミでの学びは他のことにも必ず生きてくると話した。

私自身の就活に向けて どれだけ人として 成長できたかが大事

別のゼミでドキュメンタリーの映像制作に携わっている私にとって、今回の取材は学びが多かった。徳山さん、中山さんに取材する中で、素晴らしい作品に仕上がったのは、ゼミ生同士の対話と、あきらめない強さだと感じることができた。

作品の方向性が誰かの個性に偏

りすぎてしまわないように、たくさんの意見を出し合った、ということや、さまざまな世代に徹底して取材をすることで幅広い世代に楽しんでもらえる作品にすることができた、という話は非常に参考になった。

自分にはない価値観を持ち、さまざまな経験をしてきた上の世代の方に取材して得られる新たな発見を、自分自身の映像制作に取り入れていきたいと思う。

2人の就活への考え方も印象に残った。今回の短編ドラマ制作は、2人とも就活が終わってから取り組んだという話に驚いた。2年生になり、就活を意識し始めた私は最近、「就活を失敗しないためにどうしたらいいか」とばかり考えていた。

しかし、2人の生き生きとしたまなざしを見て、中山さんの「大学でやったことは必ずどこかで役に立つ」という言葉を聞き、まずは目の前のことに全力で取り組むという姿勢が大切だと痛感した。大学でどんな知識を身につけたかということとともに、その過程で仲間とどんな時間を過ごしたか、どれだけ一人の人間として成長できたかが重要なのだと気づいた。

就活を大学生活のゴールと考えず、仲間との出会いや周りの方々への感謝の気持ちを持ちながら、さまざまな経験をして、2人のように立派な社会人になれるよう努力し続けていきたい。

（学生記者　小西結音）

▲プロデューサーを務めた中山春佳さん（左）と、原案・監督の徳山夏音さん、中央は学生記者の小西結音さん

短編ドラマ「お母さんのなみだ」

共働き夫婦と、子供で小学生の姉弟の4人家族のストーリー。ある夜、リビングで一人泣いている母親を見た弟の海（かい）と、姉の明日香が母親に元気になってもらおうと、翌日の夕食にカレーを手作りする。「急にカレーを作るなんておかしい。何かあったの？」と尋ねる母親に対し、「元気になってほしくて、お姉ちゃんと2人でお母さんに優しくしようって。だって、きのう、お母さんが泣いているのを見たんだもん」と声を震わせて訴える海。

母親は、コップいっぱいに注いだ水があふれだす様子を見せながら、「気持ちも水と一緒で、いっぱいになると、心というコップからあふれて涙になって出てくるんだよ」と語りかける。そして、涙を流した理由を話し始めるのだった――。

短編ドラマ「お母さんのなみだ」は
こちらから鑑賞できます。
https://www.youtube.com/watch?v=AEiq83hz2SM

働く喜び、やりがい　白門OB、OGから後輩へメッセージ

Career Meeting「私のしごと」講演会
キャリアセンターが初開催

▲サントリー食品インターナショナルの大塚匠さんの講演

さまざまな分野で活躍する中央大学の卒業生が、自らの仕事観をリアルに語る「Career Meeting　卒業生が語る『私のしごと』講演会」が今年5月、多摩キャンパス、茗荷谷キャンパスで開かれた。学生が働くことの喜びや、やりがいを知り、自らのキャリアについて考える契機となるよう、キャリアセンターが初めて開催した。

講演会は計4回開催され、それぞれ登壇した卒業生4人が自身の経験を踏まえて、後輩の学生たちに語りかけた。講演者はサントリー食品インターナショナルの大塚匠さん（2004年法卒）、高知放送の土居凌太郎さん（2021年法卒）、三井住友海上火災保険の石川七瀬さん（2004年商卒）、総務省（内閣官房内閣人事局出向中）の野口智紗樹さん（2017年法卒）の4人。対面とオンラインのハイブリッド形式で実施した。

大塚さんと土居さんの講演を聴いた学生記者3人に、今後の就活への糧や励ましとなった言葉、考察したことなどを綴ってもらった。

何事も先入観にとらわれない意思を持ち、やるべきことの道筋を作る

～サントリー食品インターナショナル 大塚匠さんの講演を聴いて～

学生記者　影原風音（文3）

「就活・社会人になるということ」は堅苦しく、難しい壁を乗り越えなければならないものだと捉えていた。就活は悔いなく頑張りたいと思っているものの、とても漠然としたもので、実際に行動に移して細部を詰めるような作業は全くしていなかった。

というより何をしたら良いのかが分からなかったという言い方が正しいと感じる。今回の講演会では、どんな話が始まるのだろうと初めは緊張していたものの、大塚さんの明るい口調の話を聞いていて気持ちが前向きになった。

そして、講演を通じて、もっと頭を柔軟にリラックスして物事を考えてみるという視点を得ることができた。

まずは「自分に向き合う」ということの大切さに気がついた。自分がやりたいことは何かを常に問うことで、繊細に移り変わっていく思考回路を更新していくことができる。これは、この先就活を進めていく際の自己分析や企業との相性を計る際の判断材料につながるだろうと考えた。

自分に向き合うことの大切さ

私は何か始める前にまず結果がどうなるかを考え、予想される困難や、大変なイメージを恐れて断念してしまう性質がある。余計な心配に頭を抱える場面が多く、興味のわくことがあったとしても単なる先入観でマイナスなイメージを抱き、その結果、興味を失ってしまうことがあった。

一方で大塚さんは、自分がやりたいと感じることを一番に尊重していて積極的なビジョンを持っていた。こうした考え方、発想はそれを実行するために次に必要なことを学んでいくというサイクルを生みだしやすく、何をすべきかを明確にしやすくなるのだと理解した。私もまず自分の意思を持ち、何をすればよいか分からなくなる前に道筋を作っていきたい。

また、「人と話をするときは、いかにその人に興味を持つかがポイントである」という話も印象に残った。相手の話を聞き出すために必要なことは、まずその人に寄り添ってみることだと理解した。対面でしか得られない情報や息遣いが確かにある。相手の心の声を引き出すには、相手に心を開いてもらう必要があり、その一歩として相手に興味を持つことが重要だと気づいた。

私は人間観察が好きで、特に相手の良い部分を探すことが得意だ。大塚さんの講演から学んだ「相手に興味を持つ」というポイントを踏まえながら、いろいろな人とフラットに関わることを意識し、チャンスを先入観で終わらせてしまわないように生かしていきたいと考えている。

人に寄り添い、リアルな声を聞く 探求心、学ぶ姿勢に感動

～サントリー食品インターナショナル 大塚匠さんの講演を聴いて～

学生記者　谷井花蓮（総合政策3）

大塚さんの話を聞き、働くことが楽しみになった。大塚さんは人のためになる仕事をして、自身の「ikigai」を感じている。将来は私も自分の好きなことが誰かのためになるような仕事をしたいと感じている。

講演を聴く中で、大塚さんの「学ぶ姿勢」に感動した。例えば、実際にサントリーの商品を飲んでいる人たちのもとへ足を運び、徹底的なインタビューで得られたリアルな声から、「自分たちの商品はどのように人々に寄り添えるか」を考察した。また、会議中の何げない些細な発言から、今まで気づかなかった異世代の思いに衝撃を受け、新しい価値観を得たこともあったそうだ。リアルな声、他者の意見から新たな知見を得て、それを仕事に生かすことにも喜びを感じるという。

現在も京都芸術大学大学院で学び続けているという大塚さん。常に自分の知らないことを探究し続け、成長し続けようとしていることに刺激を受けた。好奇心旺盛な大塚さんはきっと社内でも信頼される存在なのだろうと思った。

自分の行動が人の役に立ったときこの上ない「ikigai」

将来について悩んでいる人は「人はなぜ働くのか」「自分は何に心を動かされているのか」を考えるとよいと話されていた。そうすれば、当たり前のようになっている「働く」という行為を根本的に見つめ直すことができる。

働く理由は「ただ稼ぐため」ではないと私は感じる。自分が一生懸命に考え、試行錯誤しながら取った行動が人の役に立ったとき、私はこの上ない「ikigai」を感じる。成功までの過程が困難なほど、成功したときの達成感が強い。私は、人が働く理由の一つはこの達成感を得るためなのではないかと考えている。

講演を聴き、自分にある無限の可能性を信じ、人生の選択肢を広げていこうと感じた。いろいろな人に会って話を聞き、違う視点や知らなかった価値観を得ることが大切だ。大塚さんは「人生は選択の連続である」と述べたが、選択は1回限りではない。失敗したと感じる選択も無駄ではなく、そこから学ぶことで今後につなげられる。

選択の繰り返しで人は成長する。これからも、多様な人と関わり、挑戦し続けて、自分の可能性を広げ、今後の就活では幅広い業界に目を向けていきたい。

Uターンを前向きに考える 育った土地、愛着のある地元で働くことの魅力

～高知放送　土居凌太郎さんの講演を聴いて～

学生記者　近藤陽太（経済3）

地元の高知県にUターン就職された土居凌太郎さんの講演は、地方から上京して就職活動を迎えようとしている私にとって非常に参考になるものだった。大学3年生になり、就活を前にした私には地元に戻るか、東京に残るか大きな選択が迫っている。

地元は大好きだが、東京の魅力との間で葛藤している中で講演を聴いて、自分の育った土地、愛着のある土地で働くことへの魅力を感じ、Uターン就職について前向きに考えてみようと思うことができた。

最も印象的だったのは土居さんが地元をこよなく愛していることだ。地方テレビ局は県内のニュースや出来事を県民に伝える役割を持ち、在京のキー局とは異なる、地域と密着した身近な存在だ。土居さんは、県民に必要な情報を届けるという仕事のやりがいを説明し、自身が制作に携わった地元で活躍する人を特集するコーナーのVTRを紹介してくれた。それはまさに土地と人の魅力が伝わる内容となっていた。

学生時代に さまざまな挑戦と経験を

テレビ業界を志望する人へのアドバイスでは、学生時代にすべき大切なこととして「好きなものをとことん突き詰める」「広く浅くいろいろな知識を得る」「テレビで何をしたいのかを明確にする」の３点を挙げた。「好きなものを突き詰める」「いろいろな知識を得る」は一見矛盾しているようだが、「自分の武器」を作ることと、多様な分野への対応力を身に着けるという意味で、テレビ局で働くのに重要だとわかった。

就職活動では「人に何かを伝え楽しんでもらえる仕事」としてテレビ局を受けたという。「きっかけはどこに落ちているのかわからない。いろいろな経験をするのが大事」という言葉も胸に響いた。土居さんは大学

高知放送の土居凌太郎さんの講演▲

２年のときに参加したキャリアセンター主催の自己表現術セミナーで講師を務めたアナウンサーに憧れ、テレビ局に興味を持ったそうだ。

大学生活は比較的時間にゆとりのある最後の機会だと思うので、私もできるだけさまざまなことに挑戦し、経験を重ねたいと思った。

“A life is not important except in the impact, it has on other lives.”

―他人の人生に影響を与えてこそ人生には意味がある―

有色人種の米野球メジャーリーグ参加への道を切り開いたジャッキー・ロビンソンの言葉が、土居さんの座右の銘だという。

講演後の質疑応答では、私もテレビ局の仕事について質問し、大変参考になるアドバイスをいただいた。最後の「土居さんにとって仕事とは？」という質問に、土居さんは「常に頑張っている途中」と答えた。「仕事で結果がついてこないことも多いが、頑張り続けることでやりがいも感じる」と続けた。その原動力は地元を良くしたいという思いだという。

講演は、地元での就職を考えている私にとって非常に有意義な体験となった。始まったばかりの就活だが、教わったことを参考にしてベストを尽くしたいと思った。

Career Meeting
卒業生が語る「私のしごと」講演会～未来の自分を描く～

【第1回】
〈日　時〉5月15日（月）17:30～19:00
〈会　場〉多摩キャンパス・グローバル館7階
〈講演者〉サントリー食品インターナショナル　大塚匠さん（2004年法卒）
〈テーマ〉私の”ikigai”―文化を創るサントリーのシゴト

【第2回】
〈日　時〉5月19日（金）17:30～19:00
〈会　場〉多摩キャンパス・FOREST GATEWAY CHUO 3階ホール
〈講演者〉高知放送　土居凌太郎さん（2021年法卒）
〈テーマ〉故郷ではたらく～テレビ局の場合

【第3回】
〈日　時〉5月23日（火）17:30～19:00
〈会　場〉多摩キャンパス・FOREST GATEWAY CHUO 3階ホール
〈講演者〉三井住友海上火災保険　石川七瀬さん（2004年商卒）
〈テーマ〉わたしの挑戦 ～チャレンジで広がる可能性～
―海外勤務からドラレコ開発まで―

【第4回】
〈日　時〉5月25日（木）17:30～19:00
〈会　場〉茗荷谷キャンパス　1W01教室
〈講演者〉総務省（内閣官房内閣人事局 出向中）　野口智紗樹さん（2017年法卒）
〈テーマ〉社会課題の解決に向けて
～霞が関で働く国家公務員は何を考え、どのように職務を全うしているか～

（いずれもオンラインとのハイブリッド開催）